

第1回 市町村・公民館等職員専門研修 実施レポート

期日：令和7年7月23日（水） 参加者：35名（うち市町村から23名）

会場：秋田県生涯学習センター 講堂

県内の生涯学習・社会教育関係職員や公民館、市民センター等の社会教育施設の職員に求められる資質や力量を高めることを目的として「学びのユニバーサルデザイン～みんなでスポーツを楽しもう～」をテーマに、今年度1回目の研修を行いました。

【前半 講話】

前半は、「障害者の生涯学習」の研究に7年間取り組んでいる秋田県生涯学習センター副主幹（兼）学習事業チームリーダー **柏木 睦** が、「障害のあるなしにもかかわらず、誰もが楽しむために必要なこと」と題して講話を行いました。

最初に「バリアフルレストラン」の話題を例に、「多数派」と「少数派」に分かれることによって、無意識に偏った見方をしてしまい、それを「受け止めて」気づくには、経験や体験を通じて考える力を養うことが大切であると話されました。そのための方策として、「機会や場をつくる」ことが大事であり、具体的には、経験する「機会」、実施する「場所」、みんなで話し合う「場所」の3つを意識的につくることを強調されました。口頭で「いつでも遊びに来てね」と言うだけでなく、実際にスペースを設けることで、参加者が「本当に来てほしいんだ」と感じ、そこには新しいつながりや絆が生まれる「物理的な場の重要性」が大事であると話され、前半の部を締めくくりました。



【後半 スポーツ体験】

後半は、秋田県生涯学習センターの職員が講師となり、パラスポーツのひとつである「ボッチャ」と、老若男女問わず気軽なスポーツとして人気が高い「モルック」の体験が行われました。全員が両方のスポーツを体験するために2グループをつくり、「ボッチャ」と「モルック」を前後半で分け試合を行いました。初めて体験する方も多く、みなさんが真剣な姿で競技し、楽しみながらも大いに盛り上がりを見せ、障害のあるなしに関わらず楽しめる場の提供方法を実践的に学ぶ機会となりました。また、誰もが気軽な競技として長く楽しむには、多くの方がプレーしやすいように、状況に応じて参加者にルールを合わせて実施することの大切さを確認しました。

研修全体を通して、障害のある人もない人も、共に楽しめる場をつくるには物理的な環境整備や誰もが参加しやすいようなルールの工夫、そして何よりも

「本気で受け入れる姿勢」が重要であることを学びました。今回の研修は、講話と体験がセットになっていたため、より具体的に理解したり、想像したりしながら学びを深めることができた研修であり、参加者の感想からも今後、各市町村での具体的な取組が増えていくのではないかと感じました。



【参加者アンケートより】（抜粋）

- ・何より楽しかったです。視点を変え、実際に体験することで気づくことが多いことや、まず体験してみることの大切さを学ぶことが出来ました。
- ・今後、生涯学習講座を実施する上で、まず自分が体験して見えてきたものを掘り下げることが大事であることを学びました。「気づき」を大切に、いろいろな人と共有してみることを取り入れたいと思います。
- ・参加者が楽しめるような雰囲気づくりがすばらしいと思いました。ぜひ参考にさせていただきたい。みんなが楽しめるのが一番だと思います。ありがとうございました。